

## 前衛詩人たちの論争

— ビセンテ・ウイドブロ『水鏡』発行年の真偽をめぐる —

*Polémica entre poetas vanguardistas: la verosimilitud de la fecha de publicación de El espejo de agua, de Vicente Huidobro*

鼓

宗

TSUZUMI Shu

En 1916 Vicente Huidobro(1893, Santiago - 1948, Cartagena), poeta chileno, publicó El espejo de agua, un libro de poemas en los que por primera vez se reconocen el carácter vanguardista y rasgo creacionista huidobriano. La fecha de publicación del libro ha sido bastante polémica : Pierre Reverdy, francés, otro poeta creacionista que se dedicó a hacer poemas cubistas, critica a Huidobro a causa de la falsificación de la fecha de la impresión de la primera edición de dicho libro. Guillermo de Torre, crítico español y poeta que ha fundado el ultraísmo, también pone en duda la verosimilitud del testimonio del autor santiaguino.

Según Huidobro insiste, El espejo de agua fue impreso en Buenos Aires en 1916, y la segunda edición en Madrid en 1918. Ésta tiene dos versiones en las que apenas se pueden diferenciar detalles muy minuciosos, como el uso de distinta caja de tipos y la composición de los puntos suspensivos. Una de las dos ediciones impresas en Madrid es casi igual que la de Buenos Aires, pero de ésta existen pocos ejemplares.

En este pequeño artículo reflexionaremos sobre el asunto repasando los testimonios de aquel entonces y los estudios de investigadores como Cedomil Goic o René de Costa, los cuales han editado antologías de obras de Huidobro.

### キーワード

Latin American literature, Spanish avan-guarde, avan-guarde poetry, *El espejo de agua*, Vicente Huidobro, Creationism,

ビセンテ・ウイドブロ Vicente Huidobro (1893–1948) は、チリの首都サンティアゴに生まれ育った。早くから詩人を志し、1910年代の半ばに渡欧して、スペインの前衛詩運動「ウルトライスモ」の誕生に関わった。長期にわたって滞在したフランスでは、ヒュルセンバックと深交を結んで、『ダダ大全』に作品を寄せるなど、パリ・ダダの一員と目された<sup>1)</sup>。その後、独自の詩学「創造主義」を唱え、きわめて実験的な長詩『アルタソル』によって、広くその名を知られることになった。

本稿で取り上げる『水鏡』 El espejo de agua (1916) は、ウイドブロが、1915年から1916年のあいだに著した詩篇を収めた書物である。『魂の木霊』 Ecos del alma (12)、『沈黙の洞窟』 La gruta del silencio (13)、『夜の歌』 Canciones en la noche (13)、『隠された仏塔』 Las pagodas ocultas (14)、『アダム』 Adán (16) に続く6冊目の詩集で、おそらく、ウイドブロにとって特別な意味を持った。というのも、初めて母国チリの外に出て世に問うた詩集だったからである。しかし、それだけではない。『水鏡』には、それまでウイドブロが払拭できずにいたモデルニスモ——19世紀末から20世紀初頭にかけて、ニカラグア出身の詩人ルベン・ダリーオが中心となって展開された、スペイン語詩の改革運動——の調子を乗り越えようという強い意志が込められている。わずかに16ページの薄い本でありながら、そこには、詩人の裡に芽生えつつあった新しい詩を求めて奮闘するすがたがうかがわれる。つまり、ウイドブロの前衛主義的手法による最初の結実といってよい作品なのである。しかし後に、ギジェルモ・デ・トーレとピエール・ルヴェルディという二人の詩人とのあいだで、『水鏡』の出版時期についての激しい議論が戦わされることになる。本稿では、詩人の周辺にいた人々の証言と、ウイドブロ研究者たちの調査をもとに、この『水鏡』の成立時期について考察してみたい。

## ブエノスアイレスでの講演と渡欧

奥付に従えば、『水鏡』は、1916年、アルゼンチンのブエノスアイレスで初版が出た。そのあと1918年、スペインのマドリードで第2版が増刷された。前者が世に出たとき、ウイドブロの身の上に重要な出来事が起こっている。一つは、ブエノスアイレスでおこなった講演であり、もう一つは、その暮れに、家族を引き連れてヨーロッパへ移住したことがそうである。

ウイドブロが、ラテンアメリカ文芸協会に招かれて、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスを訪れたのは1916年6月のことであった。その折の講演で、ウイドブロは、のちに唱える創造主義のさきがけとなる主張をはじめて公けにした。それは、1914年にサンティアゴの文芸協会での講演をもとに起草された『ノン・セルウィアム』 Non serviam という宣言で形をとりはじめた思想を発展させたものであった。そこでは、詩人は自然に奉仕するのをやめ、むしろ、その主人たるべきだ。自然を模倣するのではなく、創造することが詩人の責務にほかならない<sup>2)</sup>。人間は自然を写す鏡ではなく、自然を創造する神である。というのが講演の趣旨だった。これが自ら創造主義と呼んだ思想の原形となった。

こうして自らの裡に、詩の変革にたいする欲求を育てていたウイドブロが、モデルニスモという、19世紀末から20世紀初頭にかけての詩的規範に浸ったままの母国チリの文学状況に不満をおぼえていたであろう、と想像に難くない。この詩人が、『アルタソル』によってスペイン語詩の歴史にその名前を刻むようになるまでの道筋は、ヨーロッパ滞在中につけられたと言われている。フレデリック・S・スティンソンやバリーといった複数の研究者は、フランス体験

があってこそ、ウイドブロの創造主義がその名称にふさわしいものとして作品に反映されるようになったと述べている<sup>3)</sup>。

しかしながら、ウイドブロが、自身の詩学の拠りどころとなる創造主義に結びつくような着想を、渡欧前にラテンアメリカで披露していたという事実は興味深い。つまり、パリに渡った時おぼろげながらも、新しい詩のあり方についての青写真を携えていたのである。後述するように、『水鏡』に収められた詩篇のいくつかが、それを示している。

繰り返しになるが、ウイドブロは、目新しいものを見出せるのではないかという期待をもって渡欧したのではなく、新しい詩を生み出そうという決意を胸に秘めていたように思われる。

1916年11月、ウイドブロは、スペイン南部の港町カディスに上陸した。しかし、アンダルシア地方には長逗留せず、すぐにマドリードを目指した。そこでは、文人たちとの交流を求めて、スペインの前衛主義の草分けであり、絵画におけるピカソに擬せられる詩人・作家、ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナが主宰していた文学・芸術サロン、カフェ・ボンボに顔を出した。こうした親睦会はテルトゥリアと呼ばれ、当時、マドリードのあちこちのカフェで開かれていた。そこに集った文人たちは、交流を深めながら文学談義に花を咲かせたと言われる。ラファエル・カンシノス＝アッセンスという作家もそうしたテルトゥリアの主宰者の一人で、マドリードでのウイドブロのよき相談役となった。

マドリードに一ヶ月ほど滞在したあと、ウイドブロはパリに移った。サン・ジョルジュ街に部屋が見つかったが、ほどなく、ヴィクトル・マッセ街41番地に落ち着いた。向かいにル・バル・タバラン Le Bal Tabarin というダンス・ホールがあった。

この最初のパリ滞在中にウイドブロがおこなった活動のなかで、もっとも目を引くのは、ナルボンヌ生まれの詩人、ピエール・ルヴェルディ Pierre Reverdy (1889-1960) と語らって、フランス前衛詩の発展過程で重要な役目を果たすことになる文芸誌、「北-南」*Nor-sud* を創刊したことであろう。

もっとも、「北-南」は、この二人の出会いから生まれたものではなく、ウイドブロがパリに到着した頃、その先駆けともいえるべき雑誌が存在していた。ピエール・アルベール＝ピロ Pierre Albert-Pirro (1876-1967) が主宰した前衛芸術誌、「シック」*Sic* がそれである。そして、ウイドブロがパリに着いて最初に親しくなったのは、アルベール＝ピロであった。

「シック」は、1916年1月に創刊され、1919年12月に廃刊になるまで全54号が出ている。その間、旗印として掲げたのは、ギヨーム・アポリネールの謳うところの<sup>エスプリ・ヌーヴェー</sup>新精神であった。「シック」は、未来派、ダダイスム、キュビスムといった新しい芸術の紹介につとめ、10年代後半のパリにおける芸術革新の推進役を果たした。「シック」という誌名は、「音」sons、「思考」idées、「色彩と形」couleurs-et formesというそれぞれの語の頭文字を取ったもので、その名前が示唆するように、詩、音楽、絵画といった前衛芸術のあらゆる分野を取り上げた。

「シック」誌には、アポリネールのほか、ルイ・アラゴン、フィリップ・スーポーといった

詩人たちが寄稿し、新精神の普及に努めた。むろんピエール・ルヴェルディも、主要な寄稿者の一人であった。当時、ルヴェルディは、『卵形の天窗』La Lucarne ovale (1916) を発表し、文学上のキュビズムを追求していた。彼をウイドブロに紹介したのは、アルベール＝ピロであった。「豎琴とパレット」Lyre et Palette という店でルヴェルディのために開かれた会合に、ウイドブロを連れて行ったのである。初めて出会った二人の詩人はすぐに意気投合した。その結果、誕生したのが、「北－南」だったのである。

「北－南」という誌名は、モンパルナスとモンマルトルを結ぶメトロの路線から取られたもので、字体までまねるといふ念の入れようであった。1917年3月から1918年10月まで、16号にわたっている。ウイドブロはこの雑誌に作品を発表しただけでなく、運営にも深く関わり、10号までの費用を提供した。もっとも、チリからの送金が遅れ支払いが滞ることも稀ではなかった。雑誌の編集を引き受けたのはルヴェルディのほうで、創刊号から最終号まで編集長を務めた。

ウイドブロとルヴェルディが率いる「北－南」に集った詩人たちは、「シック」の場合と同様、多くがアポリネールを慕っていた。寄稿者たちの中には、ユダヤ人の血を引くブルターニュ地方出身の詩人、マックス・ジャコブ Max Jacob (1876-1944) や、のちにパリ・ダダを代表するひとりとなるポール・デルメ Paul Dermée の名前が見られる。

「北－南」の誌面において、ウイドブロは、ルヴェルディやジャコブとともにキュビズム的な表現を追い求めた。ウイドブロが「北－南」に発表した詩は、全部で12編に及ぶ。それらの大半が、やがて『四角い地平線』Horizon carré (1917) と題される詩集に収められるのである。

『四角い地平線』は、ウイドブロの作品のうちでも重要な位置を占めている。そこには、ブエノスアイレスの講演で明らかにした創造主義的な主旨に添った詩作がおこなわれているからだ。つまり、前衛主義の思想を実際に作品化して見せたのである。また、この詩集は、創造主義が熟成してゆく過程で、キュビズムが重要な役割を負っていたことの証しとなっている。実は、『四角い地平線』に収められた詩は、すべてフランス語になっている。ウイドブロは、ルヴェルディや画家ファン・グリスの協力を得て、スペイン語を翻訳したのだが、その中に、「悲しい男」“El hombre triste”、「陽気な男」“El hombre alegre” という最初に『水鏡』にスペイン語で発表された作品が含まれている。すなわち、ウイドブロの詩は『四角い地平線』において前衛主義への傾倒をいっそう深めていったが、その原点は『水鏡』にあったと言っている。

## 『水鏡』の刊行年をめぐる論争

『水鏡』は小冊子のかたちで、ウイドブロの存命中に三つの版が世に出されている。著者の死後には、ウゴ・モンテス Hugo Montes 編『詩選集』Obras poéticas selectas (1957)、ブラウリ

オ・アレナス Braulio Arenas 編『全集』 *Obras completas* (64)、モンテス編『全集』(76)、セドミル・ゴイック Cedomil Goic 編『詩篇』 *Obra poética* (2003) に全編が収録されている。初版は1916年、チリではなくアルゼンチンで上梓されたが、部数が僅少であったせい、後述するように、その存在の真偽をめぐる論議が持ち上がっている。

ゴイックの解説によれば<sup>4)</sup>、『水鏡』は、1916年、『アダム』に続くオリオン叢書の第2巻として、ブエノスアイレスで刊行された。副題は、「詩篇1915年-1916年」 *Poemas 1915-1916*。判型は22センチ×14センチ<sup>5)</sup>で、8ページ目を除いてノンブルは打たれていない。この版は発行部数が僅少のため、ほとんど現存しておらず、ウイドブロ家に伝わるものほか確認されているだけである。その中に、息子ビセンテの署名入りのものと、娘マヌエラの署名入りのものがある。後者から、ファクシミリ版、および複数の図書館で所蔵される複写版が作成されている。

また、『水鏡』は、1889年生まれのアルゼンチンの詩人、フェルナン・フェリクス・デ・アマドール Fernán Félix de Amador に捧げられている。リカルド・アラウホ Ricardo Araujo によれば、この人物には『ヴィータ・アブスコンディータ』 *Vita abscondita* (1916) という著作があり、そこには「ビセンテ・ウイドブロに」 “A Vicente Huidobro” という献辞付きの「沈黙」 *Silencio* と題された詩があるという。『水鏡』の発行年をめぐる論争に関して、ウイドブロの友人であるスペインの詩人、ファン・ラレーアは、フェリクス・デ・アマドールをウイドブロが頭の中で考え出した人物ではないかと述べている。でなければ、ウイドブロが中傷者たちへ反論したとき、なぜ同道しなかったのだろうかと言っている。

『水鏡』が広く知られるようになったのは、第2版によってである。これには、二種類の異本が存在するが、いずれも1918年にマドリードで発行されたものだ。一つの版は、巻頭に発行日が示されていない。これとブエノスアイレスで出た初版とのあいだには、ほとんど異同がない。詩の掲載順序の変更はなく、活字も同じものが使われている。8ページ目だけにノンブルが見つかること、省略符が五つのピリオドからなっていることなど、細部の違いもない。異なるのは、表紙とカバーと扉ページの印刷に用いられた活字である。判型が19センチ×14センチ<sup>6)</sup>と、縦が少し短い。

1918年のもう一つの版についていえば、そこに記された版、出版地、出版年の表記に違いがあることを別にすると、表紙とカバーはブエノスアイレス版と同じである。しかし、ブエノスアイレス版にあった扉ページがなく、本文中の印刷も別のものである。印刷の活字が前出の二つとは異なっており、省略符に使われるピリオドの数も、三つの場合と、五つの場合が混在している。もっとも大きな相違は、詩篇の収録順序が変更されている点である。また、この本では、初版が1916年だという記述の位置が、奥付の下部から上部へと移動している。判型は、もう一つのマドリード本と同じである。

目次に関しては、ブエノスアイレスの版とマドリードの第一の本では同じ活字が使われてい

る一方、第二の本は、活字とポイント数が異なっている。ゴイックが指摘するこうした相違点から推測すれば、次のような結論が得られるだろう。すなわち、ブエノスアイレス版とマドリードの第一の本は、同じ組版を用いて、それぞれ別の紙に印刷されたものであること。他方、第二の本は、第一の本と同じ印刷所を利用しながら、ポイント数や版組みを変更し、異なる装いで出されたのだ、ということである。

ウイドプロが渡欧前に出したブエノスアイレス版は、少部数の私家版といって差し支えないもので、マドリードでの入手が困難であったことは想像に難くない。だが、その実在に疑念がもたれた背景には、当時の前衛主義の詩人たちのあいだに生じていた葛藤がある。

『水鏡』初版の存在について疑義を申し立てた一人は、ギジェルモ・デ・トーレ Guillermo de Torre (1900 - 71) である。ギジェルモ・デ・トーレは、その誕生にウイドプロも密接に関わったスペイン語詩の代表的な前衛運動、ウルトラリスモにおいて指導的な役割を果たした詩人である。文芸評論家としても名を馳せており、『ヨーロッパの前衛文学』 Literatura europea de vanguardia (1925) という作品は、ヨーロッパで1920年代までに出現した前衛主義文学について語る際になくしてはならない資料となっている。その本の中で、ギジェルモ・デ・トーレは、第一部の四分の一を費やしてウルトラリスモの成立と発展について述べている。そのあと、創造主義についての考察をおこない、ウイドプロとルヴェルディの二人のどちらが創造主義の創始者であるかをめぐる論議を取り上げている。

ウイドプロは渡欧した時すでに、創造主義につながるような着想を得ていたことを、どうやって人々に納得させるのだろうか、とジェルモ・デ・トーレは疑問を投げかけている。というのも、1916年の秋、ウイドプロがマドリードを訪れた際に携えていた詩集——『沈黙の洞窟』、『隠された仏塔』、『アダム』——には、まだダリーオの詩の響きが残りの、のちに創造主義に発展していくような要素は見出せないのだから、と述べている vii。加えて、『四角い地平線』 (1917) をパリで発表した翌1918年、マドリードをふたたび訪れたウイドプロが、『赤道儀』 Ecuatorial、『極北の歌』 Poemas árticos、『アラリ (戦闘の詩)』 Hallali (Poème de guerre)、『エッフェル塔』 Tour Eiffel と相前後するように出た詩集、つまり『水鏡』の第2版についても訝しい点がある、と以下のように主張している。

Y además, tendiendo a preparar la coartada polémica, imprime la segunda(?) edición de un folleto con seis poemas, *El espejo de agua*, que no conocíamos y que su autor hace datar de 1915 (Buenos Aires). Es en algunos de los versos de esta minúscula e incolora *plaque* donde él quiere hallar los precedentes germinales de su manera creacionista, recordándonos que algunos poemas de esta cartilla, como *El hombre triste* y *El hombre alegre*, pasaron luego traducidos a su *Horizon carré*.

([ウイドプロは] それら [の詩集] に加え、多分に議論の余地があるアリバイを用意しようとして、6編の詩を収めた小冊子『水鏡』の第2(?)版を出した。これは誰にも知られていな

かった本で、著者は初版が1915 [ママ] 年に（ブエノスアイレスで）出たものだと思わせようとしている。このささやかで目立たない小冊子<sup>ブックレット</sup>に載った詩行のいずれかに、彼の創造主義的手法の萌芽といえるような先例を見出そうとしたのである。そして、「喜びの男」や「悲しい男」のような、この小読本に載った数篇が、のちに『四角い地平線』に仏訳されたのだと想像させようとしている）

ギジェルモ・デ・トーレが問題にしているのは、ウイドブロが主張する『水鏡』の発行年の真偽についてである。つまり、『水鏡』が1916年にブエノスアイレスで出たというのは著者の捏造ではないかと問い質しているのである。ギジェルモ・デ・トーレは、すでに1920年にマドリードの文芸誌「コスモポリス」*Cosmópolis*<sup>8)</sup>において同じ疑問を呈しているという。また、ルヴェルディも同じ頃、「自由主義」*El Liberal* 紙（Madrid, 1920年6月20日付）に掲載された、エンリケ・ゴメス・カリージョとのインタビューで同じことを指摘している。

ブエノスアイレス版の発行日から、マドリードの第2版の発行日までのあいだに、2年ほどの月日が流れている。もし、ギジェルモ・デ・トーレがいうように、ブエノスアイレス版の存在があやしいのであればあるほど、この時間のずれは、創造主義的な詩に最初に着手したのは誰なのかという、ルヴェルディとの論争においては重要な意味をはらむことになる。

ウイドブロが「初版」を出したのは、一時は「北-南」の発行において協力し合い、詩作において同じ方向性を目指したルヴェルディとの対立以外に考えられない。ルヴェルディの『卵形の天窓』や『数篇の詩』*Quelques Poèmes*が発表されたのは、1916年のことであり、これに先んじないまでも遅れをとりたくない、というのがただ一つ想像しうるウイドブロの動機である。しかし、ウイドブロの詩とルヴェルディの詩のあいだに見られる熟成度の違いを考えたときに、それさえ不要なことのようと思われる。いずれにせよ、ルヴェルディのブエノスアイレス版に関しての当てこすりは、自分こそが創造主義の首唱者であると主張したかったからに違いない。

ウイドブロにとって不利な点はいくつか挙げられる。1978年、ウイドブロの死後のことだが、ファン・ラレーアは、ファン・グリスから聞いた話として次のような証言をしている<sup>9)</sup>。ウイドブロが、マドリードにおいて『エッフェル塔』、『アラリ』、『赤道儀』、『極北の詩』という4冊の詩集を刊行したときに、『水鏡』も印刷させた。その中に、1916年にブエノスアイレスで上梓されたと記されたものが2部混じっていたというのである。ゴイックは、それが、マドリードで出た第2版を複数の図書館で確認できるけれど、初版がまったく見つからないことの説明になる、と述べている。また、当時の書物にも、『水鏡』の予告記事が見当たらないこと、そして、1917年、オルテガ・イ・ガセーに自分の詩集『アダム』と『隠された仏塔』を進呈していながら、刊行まもないはずの『水鏡』について何も触れていないことを指摘している。

## 『水鏡』と『四角い地平線』

ギジェルモ・デ・トーレの『ヨーロッパの前衛文学』からの引用の中で言及されている『四角い地平線』には、ウイドプロの前衛的な傾向がはっきりと現われている。ここで問題となるのは、「喜びの男」と「悲しい男」という二つの短い詩篇がいつ書かれたものかという点である。これらの作品に関して、ギジェルモ・デ・トーレは「仏訳された」と書いているが、それは『水鏡』の言語、つまりウイドプロの母語、スペイン語から、『四角い地平線』で使われたフランス語に直されていることを指している。

『水鏡』の手稿は現存しないが、「悲しい男」の場合は手稿が残っている。ところが、これは、『四角い地平線』に載ったフランス語版の「悲しい男」からのスペイン語への新訳であり、従って1917年以降に書かれたものであることがはっきりとしている。『詩篇』<sup>10)</sup>には、行の空け方や、言葉の配列がそれぞれに異なるスペイン語による「悲しい男」の三つの版が収録されている。とはいえ、フランス語からの新訳が1917年以降のものであるという事実は、『水鏡』に収められている「悲しい男」の版がそれよりもあとに出たことを直ちに意味しない。

ここで確認しておく、『水鏡』には、「詩学」“Arte poética”、「水鏡」“El espejo de agua”、「悲しい男」“El hombre triste”、「陽気な男」“El hombre alegre”、「夜想曲」“Nocturno”、「秋」“Otoño”、「夜想曲 その二」“Nocturno II”、「新年」“Año nuevo”、「誰かが生まれようとしていた」“Alguien iba a nacer”の9編が収められている。『水鏡』の1年後に出た『四角い地平線』の第一部は、『水鏡』にほぼ対応するかたちで編まれている。「悲しい男」“L’homme triste”、「陽気な男」“L’homme gai”、「秋」“Automne”、「新年」“Nouvel an”については、スペイン語の表題がそのまま翻訳されている。また第一部の最後に置かれた「靈魂」“Âme”は、題名こそ変わっているが、一読すれば、「誰かが生まれようとしていた」の翻訳であることがすぐに分かる。

問題は、『水鏡』の冒頭にある「詩学」と「水鏡」である。「詩学」は、全編中でもっとも重要な詩である。というのも、最初期の創造主義の美学を反映した作品といえるもので、“El Poeta es un pequeño Dios.”（「詩人は小さな神である」）という最後の一節によってよく知られている。しかし、これらの詩篇については、『四角い地平線』には翻訳が見当たらない。ただし、「新しい歌」“Nouvelle chanson”、「鏡」“Glace”の調子や方向性に注目すれば、件の2編の詩に呼応するものとして、新しく書き下ろされたのであろうと推察される。

1917年4月に発行された「北-南」第2号には、マックス・ジャコブやアポリネールといった詩人たちの作品に混じって、ウイドプロの「悲しい男」が、ルヴェルディによる仏訳で掲載されている。それは、ウイドプロが、少なくともこの年の早い時点で、母国語により当該の詩を完成させていたことを示している。従って、初版を1916年とする説に疑義をはさむ人たちが、『水鏡』の詩篇が1918年の作であると主張するには無理があると言って差し支えないだろう。



## セドミル・ゴイックがもたらした最新の結論

今日、ギジェルモ・デ・トーレが提起した『水鏡』の初版が1916年に出たかどうかの問題にたいしては、結局、ウイドブロと同じチリ人で『全集』の編者でもあるブラウリオ・アレナスの「今この瞬間、わたしたちは問題の1916年の版のページを繰っているのだから」<sup>11)</sup> というひと言が決着をつけてくれるのではないか。様々なウイドブロの書誌によれば、『水鏡』の刊行年は、作者が主張するとおり、1916年になっている。

ゴイックも、複数の証言を検討した上で、ウイドブロが『水鏡』の出版年を偽ったという主張を退けている。しかしその上で、最近おこなわれた調査によって判明した新たな事実<sup>12)</sup> として、以下のようなことを指摘している。まず、1919年、ブエノスアイレスの新聞「時代」*La Época*に載ったインタビューにまつわる逸話がある。この記事で、聴き手はウイドブロの経歴を次のように紹介している。“Es autor de La gruta del silencio, Las pagodas ocultas, Adán, El espejo de agua, libros de versos publicados en Madrid, y de Horizon carré, Tour Eiffel, Hallali, Ecuatorial y Poemas árticos(sic.) en París”（「氏は、マドリードで出版された詩集、『沈黙の洞窟』、『隠された仏塔』、『アダム』、『水鏡』、そして、パリで刷られた『四角い地平線』、『エッフェル塔』、『アラリ』、『赤道儀、および（ママ）極北の歌』の著者です）インタビューアが、『水鏡』の出版地をブエノスアイレスではなくマドリードと間違えているにもかかわらず、ウイドブロはそれを訂正しようとしな。ウイドブロはこの紹介が、自分の主張と相違していたにもかかわらず、インタビューアという言葉を否定しなければならない立場にあることを忘れたのだろうか。

この記事ひとつで、ウイドブロが出版年を偽っていたと証拠とするのは難しい。少なくとも、二つの説明が考えられる。一つは、マドリードで出版されたものとして挙げられている詩集の中にサンティアゴで出されたものが混じっていることから、ウイドブロがあえて否定しなかったか、否定するのを忘れたのではないだろうか。もう一つは、記者がインタビューを記事原稿に起こす際に、出版地を書き足したが、ウイドブロはそれを修正しなかった、ということである。

そして、ゴイックはもう一つ、「時代」の記事とともに新たに見つかった事実を指摘している。ウイドブロが母親に宛てた2通の書簡がそれである。そこには、決定的なかたちで、『水鏡』初版の発行年について言及がなされている。

『水鏡』の発行年を推定する手がかりとして、ゴイックが提示したのが、ウイドブロが母親に書き送った手紙にほかならない。一通は、1917年1月もしくは2月9日の日付がある。もう一通は1918年5月5日にボーリウ・ブレ・ロッシュから出されたものである。カルロス・アルベルト・クルス氏が所有する最初の手紙には、「100の電灯をともすのに一つのボタンを押すだけで足りる」20世紀初頭にふさわしい新しい美学を伝える詩として、『水鏡』の巻頭にある「詩学」の最初の5行が引用されている。それは以下のとおりである。

“Que el verso sea como una llave / Que abra mil puertas... / Pasa volando un pájaro, una hoja cae. / Cuando busquen los ojos que nada vean / Y [sin embargo] el alma sin embargo / Quede temblando.” (「詩は千の扉を開く／鍵のようであれ……／小鳥が飛び去り、木の葉が散る。／目は探し求めて何も見えず／(それでも)魂はそれでも／おののくときに」)。

印刷に付された『水鏡』では、一行目の始まりの位置や行改めの仕方が、この手紙とは異なっている。“ Que el verso sea como una llave / Que abra mil puertas. / Una hoja cae; algo pasa volando; Cuanto miren los ojos creado sea, / Y el alma del oyente quede temblando.” (「詩は千の扉を開く／鍵のようであれ。／木の葉が散る。何か飛び去る。／目に見えるものすべてが創造され、／聞く者の魂がおののくように」)。

ゴイックは、こうした違いが見出せることから、1917年初頭には、詩がまだどの本にも収録されていなかったという推論が可能であるとしている。しかし、1918年の書簡は、さらに決定的な証言が含まれている。フランス語版の「悲しい男」にたいする母親の手紙に答えたものである。“Y antes era una plaquette que publiqué en España en noviembre de 1916. Es uno de los pocos poemas del libro que fueron escritos antes en español y traducidos por mí mismo al francés cuando empezaba a profundizar la lengua.” (「以前は、1916年の11月にスペインで出した小冊子でした。詩は、件の本に載せたうちの一編で、最初はスペイン語で書き、フランス語をもっとしっかりと身につけようと思って自分で翻訳したものです」)「件の本」とは、『四角い地平線』のことだが、ウイドブロはこの手紙で初めて、1916年11月にスペインで、一冊の小冊子を出したことを認めている。それが『四角い地平線』の一部をなす作品であること、そして「悲しい男」が収められた詩集であること、この2点から『水鏡』を指していることはまちがいない。母親に宛てた私的な手紙である以上、偽りを述べる必要はなく、出版地として、ブエノスアイレスを挙げていないことが引っかけが、『水鏡』が1916年に出版されたことに疑いを入れる余地はないだろう。

では、ルヴェルディが、出版年を偽ったとしてウイドブロを非難したわけは何だろう。上に引いた手紙では、自作を仏訳する際に得たルヴェルディの協力について触れられていない。それは、親交のあったファン・グリスの援助についても同様なのだが、「北-南」の誌上で謳われているルヴェルディの協力関係を無視していることは、二人のあいだの感情のもつれをうかがわせる。

1931年12月、ウイドブロは、批評家のアンヘル・フロレス Ángel Flores とのあいだで、『水鏡』の出版年の問題について手紙のやり取りを重ねている。ウイドブロは日付不詳の手紙の中で、1916年に出した小冊子が『四角い地平線』の第一部に組み込まれていると明言している<sup>13)</sup>。もっとも、その際、詩の仏訳への協力者としてファン・グリスの名を挙げながら、ルヴェルディについては触れていない。そうした二人のあいだの感情的な行き違いに、『水鏡』初版の問題がこじれることになった原因があるにちがいない。

以上、『水鏡』の発行年をめぐる諸説を検討してきた。『水鏡』は、ウイドブロにとって新しい言語であるフランス語に訳されたあと、『四角い地平線』の一部となった。「四角い」ということばが暗示するように、以後、ウイドブロはキュビスムの詩に手を染めことになる。ウイドブロは、ルヴェルディやマックス・ジャコブらとともに、接続詞など論理的なつながりを示すことばを使わず、距離感のある、異なった複数の要素を並置するという技法を探求していくが、すでに『水鏡』において、ウイドブロがそうした技法を念頭においていたと思われるふしがあり、まことに興味深い。『水鏡』に収められた詩篇の内容や、この詩集と『四角い地平線』との関係については、稿をあらためて取り上げたい。

付記：本稿は、平成15年度、関西大学在外学術研究員としてスペインのアルカラ・デ・エナレス大学に派遣された研究成果の一部として公表するものです。

#### 注

- 1) Riha, Karl. *Dada 113 Gedichte*, Berlin Verlag Klaus Wagenbach, 1982, 1992, 2003(邦訳カール・リーハ編『ダダの詩』宇佐見幸彦訳、大阪、関西大学出版部、2004年)にも、*Paysage*「風景」が収載されている。
- 2) ウイドブロがこうした思想を抱くにいたった背景には、エマーソンの影響がある。同年、すでにサンティアゴで出版されていた『アダム』の前文には、エマーソンの『エッセー第二集』に収められている評論「詩人」(“The poet”)が長く引用されている。さらに続けて、このアメリカの詩人が忘れがたい安らぎと平静を、そして新しい詩を生み出すための着想を与えてくれたことへの謝意が述べられている。
- 3) Stimson, Frederick S., *The new schools of Spanish American poetry*, Madrid, Castalia, 1970. p.99.
- 4) Vicente Huidobro, *Obra poética*, Madrid, ALLCA XX, 2003. pp.379-380.
- 5) この数値は、Vicente Huidobro. 2003のセドミル・ゴイックの手になる書誌によった。同書の『水鏡』の解説では、18センチ×12.3センチとなっている。この初版を元にしたファクシミリ版について記載されたサイズが、22センチ×14センチであることから、書誌のデータを正しいものとして採用した。
- 6) この版のサイズも解説では、18センチ×13センチであるとされている。
- 7) Guillermo de Torre, *Literatura europea de vanguardia*, edición de José Luis Calvo Carilla, Pamplona, Urgoiti, 2002. pp.71-72.
- 8) *Cosmópolis*, 20 (Madrid, 1920) pp.589-605.
- 9) Huidobro, 2003. p.385.
- 10) Huidobro, 2003. p.393-394, p.395-396, p.427-428.『四角い地平線』のフランス語版は、p.425-426.に載る。
- 11) Huidobro, *Obras completas*, edición de Braulio Arenas, Santiago, Zig-Zag, 1964. p.23.
- 12) Huidobro, 2003. p.388.
- 13) <<Ma plaquette *ESPEJO DE AGUA*, que vous n'avez jamais lue, n'a pas été Paris (nouvelle erreur dans laquelle vous tombez), mais à Buenos Aires, en 1916. Elle a été traduite par moi-même et par

Juan Gris et forme la première partie de mon livre Horizon carré. Celui-ci publié à Paris en 1917. Elle serait plutôt pos-daté qu'antidatée. >> Huidobro, 2003. p.384.